

を、後者には總説、史料學、史料批判學、綜合、表現の五章を立て、附録には史學に對する疑義、史學と社會學古文書學及び古書學に就いて、歴史の教育的價值、の四編を收め、最後に史學に關する參考書を懇切に紹介してある。その所説は著者が斯界の碩學の先蹤を重んずるこいふ念慮に基づいて東西諸學者の權威ある論著を要約されたものであるから讀者は之によつて史學に關する大體基礎的知識を了得することが出来る（四六版、三九二頁、東京、早稻田大學出版部發行、價二、五〇）〔松野〕

● 近世世界政治外交史論 文學士吉村勝治著

近代の生活は凡て國際的なるところに大なる價值を置かうとしてゐる。政治の進運、經濟、學術、藝術、思想等の發展も、この世界的進歩を理解せずには眞個の判斷をなし得ない。殊に最近の政治と外交は實に複雑微妙な國際關係を基礎として動いてゐる。かゝる世界の國際關係の眞相を知るにあつて、日々の新聞紙上の記事は其の局部の報道に專なるために、大勢の推移を總攬しがたしい。この點に於て適當なる最近世史が一般國民常識の上

にも必要とせられる。しかし歴史家の研究は、概ね距りたる時代に寧ろ興味を置き、最近の情勢を知るべき基礎としての歴史は、専門的研究は別として、多く顧られなさまである。本書は其書名の示す如く、「自佛蘭西革命至ロカルノ條約、近世世界政治外交史論」として著者が特に現代生活と關係深き近世の世界史的進展を總括せんこの企圖より、編まれたものである。浩瀚なる専門的著述がもつ難解なる事實の細叙、教科書の編著にある無味乾燥のいづれの弊にも陥ることなく、其方法に於ては學術的にして其目的にあつては實用的なるを期して、著者が立命館大學、大谷大學に於ける近世史講義の經驗より廣く政治外交の全般に亙りて史實と評論を適當に處理按排してこの論述をなしたものである。

従つて本書の特色はこゝにあつて、全體に於て繁簡よろしきを得、記するところは佛蘭西革命の思想的方面より那翁及那翁戰爭、産業革命、米國モンロー主義、英國選舉法改正、普佛戰爭、英國政黨政治及二大政治家、愛蘭問題等種々興味ある問題によつて章節を立て、更に三

國同盟、日英同盟等より遂に世界大戰に至るを叙し、世界史の諸問題は漏らざるをつつめ世界戦争後の記事に於てはなほ百數十頁を費し本書の四分一を占めたり。大戰以後の世界形勢を觀るによろしく、本書の價値たるこの要を摘みて終始大勢の變遷に注意せるものも、亦此所にあらはれてゐる。本書は學校に於ける西洋史教科の參考書たるのみならず、一般讀書界に於て要を得たる近世世界事情通觀の好著として歓迎せらるべきものである。(大同館發行、價三、五〇)〔西田〕

● Histoire et Historiens depuis cinquante ans.

1876—1926 1927—28 Paris Felix-Alcan.

今日佛蘭西の有力な學術雜誌たる Revue historique が G. Monod 氏によつて創刊されたのは一八七六年の事である。氏は一九二二年に歿したが雜誌は今年五十四週年を迎へた。本書はその五十週年を記念して出版されたもので、過去五十年間に於ける世界各國の歴史研究の發達を論述し、上巻は獨逸を始めし歐洲の二十四國を含み下巻はアメリカ支那日本を載せ、その他に古代東方、埃及、

印度、希臘、羅馬、ビザンツ、回教等に關しては諸國を通じての歴史研究の概要を記して居る。各國及び各部は夫々專攻の士が分擔し、例へば獨逸は維納大學の Doppen 氏、佛蘭西はボルドウ大學の Halphen 氏、支那及び中亞は H. Maspero 氏等が筆を執つて居る。日本に就いては 三浦 氏が當つて居るが修史局の設立の頃から初めて史籍集覽、國史大系の刊行等を述べて明治末年に及んで居る。本學に就いても「古文書」考古學研究報告」の出版や「史林」藝文」の刊行の事を書いて居る。勿論八百頁足らずの書冊中に四十餘の部門を含む故詳細を盡して居ないの言ふまでもなく、編纂者も決して完全なるピブリオグラフィーたらしめる考のない事、單に歴史研究に關する學者の業績、史料の編纂、學會の狀況等の概要を示さうとしたに止まる事を斷つて居るが、讀者にはや、物足りない感を抱かしめる。又諾威、チエツクスロヴァキア等に就いての記述が佛、米、伊等のよりも詳細である事も我々にまつては遺憾である。然し取捨は略々當を得て居り、古代埃及の年代等に就いては特に詳説して居る點等